奈文研第10回東京講演会（2018/10/13）
「藤原から平城へ　平城遷都の謎を解く」
みなさまからいただいたご質問に対する回答

去る 10 月 13 日（土）の有楽町朝日ホールにて開催いたしました奈文研東京講演会「藤原から平城へ　平城遷都の謎を解く」には、多数のみなさまにご来聴いただき、まことにありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。

当日会場ではご質問にお答えする時間がありませんでしたので、質問票の形でご質問をお受けしたところ、多数のご質問をお寄せいただき、報告者一同感謝いたしております。

遅くなりましたが、下記に回答を記しますのでご参照ください。ご質問は、報告者順とし、最後に全体に関わる事項を並べ、１から 39 までの通し番号を打ちました。ご質問の文章は、その意図を生かしてアレンジしてありますことをご諒解ください。同じ趣旨のご質問にはまとめてお答えしている場合もあります。また、充分な回答のご用意のできなかったご質問もありますが、今後の検討課題ということでご容赦ください。

なお、これらの回答は、報告者の個人的見解に基づく文章をとりまとめたものであることをご諒解ください。

【渡辺晃宏「平城京の歴史的位置―遷都とその契機―」について】

1、大極殿の「日本風空間」と「中国風空間」というのはどのような点をいうのか？

⇒ 日本風というのは、床を張ってすわって作業をする空間、中国風というのは、土間に机と椅子を置いて作業をする空間です。藤原宮大極殿は礎石建物で、純粋に中国風の土間の空間でしたが、この段階では、儀式はともかくとして、日常的な政務までをも土間の空間で行えるような状況ではなく不都合が生じたため、平城宮に移築するに際しては、中国風の大極殿とは別に、掘立柱で床を張った日本風の空間として壬生門北の地域に大安殿を建て、朱雀門北の（第一次）大極殿は元日朝賀や即位式、外国使節との謁見など、限られた儀式の空間に特化したと考えるわけです。奈良時代後半には、唐風化が進み、儀式も日常的な政務も全て中国風の土間の空間で行えるようなった結果、大安殿を礎石建物に建て替えて中国風の第二次大極殿とし、ここで儀式も日常的な政務も全て行えるようになりました。

2、藤原京建設の時には南の土地が高いということは問題にならなかったのか？

⇒ 問題になった可能性はありますが、都市空間を伴う都城の建設が最優先されたのだろうと考えます。それまで継続的に宮殿を営んできた飛鳥地域を離れることがにわかにはできなかった、つまり飛鳥に近いということが重視されたという理由もあるかも知れません。ちなみに、唐長安城は、藤原京と同様に南東部が高く、北へ低くなっていく地形です。皇帝の当初の居地である太極宮は、低い場所となっていました。

3、平城京に中枢区画が２つ存在したのは、権力が２つに分かれた事を意味するのか？例えば、生前退位等により、元正太上天皇と聖武天皇が並立する時代があったのか？

⇒ 権力が２つに分かれたわけではありません。あくまで儀式の場と日常政務の場の使い分けという話です。退位した天皇、すなわち太上天皇は、奈良時代においては天皇と同じ権限を分掌していましたので、場合によっては孝謙太上天皇と淳仁天皇のように、対立することもありました（最後は 764 年の藤原仲麻呂の乱で決着します）。元正太上天皇と聖武天皇は、時に意見の違い見られた時期もあったようですが、明確な対立にまでは至っていないと考えます。

なお、奈良時代後半の平城宮には、天皇の内裏とは別に、内裏とほぼ同規模の西宮が太上天皇宮として建設されました（西宮の位置は、第一次大極殿の跡地にあたります）。内裏と太上天皇宮の併存は、恭仁宮に始まり、紫香楽宮に受け継がれ、そして奈良時代後半の平城宮に受け継がれたとみられます。

4「ナラ」の表記と意味を知りたい。韓国語では「ナラ」に、「クニ」の意味があるという。それならば「ナ」と「ラ」にはどんな意味があるのか？　また、新羅・耽羅・加羅と同じ「羅」を用いて、「ナラ」を「那羅」・「奈羅」と表記することもあったというが、「羅」には何か意味があるのか？

⇒ 「ナラ」は土地を平らにならす、の意味と考えるのが最も一般的です。韓国語の「ナラ」に「国」の意味があるのはたいへん興味深い事実で、それが地名「ナラ」の語源かどうかはわかりませんが、検討の価値のある課題と思います。一方、「ナラ」の「ラ」に、新羅や耽羅と同じ「羅」を宛てる場合があるのも興味深いことですが、これはあくまで音の表記法であって、そこに特別の意味を見出すのは難しそうです。

【海野聡「建物の移築にみる藤原京・平城京」について】

5、平城宮第一次大極殿院の木樋に転用した藤原宮大垣の柱の年輪年代は判明しているのか？

⇒ 中がくりぬかれていて、測定に充分な年輪が残っていないこともあり、年輪年代測定は実施していません。

6、長岡京、平安京への遷都の際に、平城京の建築物の移築はあったのか？

⇒ 平城宮の宮城門を長岡宮に移築したことが、十二門全部かどうかはわかりませんが、『続日本紀』に記録されています（延暦 10 年〈791〉９月甲戌〈16 日〉条：仰越前・丹波・但馬・播磨・美作・備前・阿波・伊予等国、壊運平城宮諸門、以移作長岡宮矣。〈後略〉）。発掘調査の成果でも、長岡宮の建物は、難波宮から移築されたと考えられています。長岡京へは約半年の急な遷都であったため、資材運搬による移築は有効であったのでしょう。

7、薬師寺東塔（伽藍も）が平城創建とする根拠はなにか？　年輪年代等で木材の伐採年がわかったとして、移建したときの取換材の可能性はないのか？

⇒ 心柱をはじめとする複数の部材から８世紀の伐採年代が出ており、いずれも取替材ではなく、当初材とみられます。特に心柱は腐朽しにくい部分にあるため、移築であったと仮定して、わずか数十年後の平城建設で取替材を必要としたとは考えにくく、東塔は平城での新建の可能性が高いと考えられています。

8、薬師寺の裳階付きの重層建築は特殊なものなのか、それとも当時は他にも例があった一つの様式なのか？

⇒ 発掘調査などを見る限りでしかわかりませんが、薬師寺縁起などで塔の各重に裳階があるとわざわざ記していることから、特殊な形であったと考えられます。

9、移築対象となったのは大極殿だけなのか？　他の建築物は全くないのか？

⇒ 藤原宮から平城宮へ移築された可能性のある建物は発掘調査から大極殿・朱雀門が想定されますが、ほかは確認されていません。

10、『続日本紀』によると平城京から恭仁京へ移った後も、平城京の留守官が任命されているが、これは藤原京から平城京の移転についても同じか？　それは戻る事も想定していたのか？

⇒ 藤原宮から平城宮への遷都の際にも、藤原宮留守が置かれています（『続日本紀』和銅３年３月辛酉〈10 日〉条：始遷都于平城。以左大臣正二位石上朝臣麿為留守。）。大極殿の移築はまだ始まったばかりでしょうから、藤原宮に留守官を任じることは現実的な措置だったと思われます。当時の政治と遷都を実質的に主導していたのが右大臣藤原不比等であるにせよ、それよりも上位の左大臣石上麿を留守として藤原宮に残して来たのは、遷都がいかに大事業であったかをよく示していると思います。ただ、藤原宮がすぐ廃されたのではないことは確かですが、必ずしも戻ることを想定していたと考える必要はないと思います。

11、大極殿や朱雀門や寺院の塔のような立派な形式は、中国でいつ頃からどのように発展してきたのか？

⇒ 中国の古い建築が残っていないので明らかではありませんが、中華思想は古く漢代からあり、冊封体制を築いており、周辺国よりも立派な建築を築いていたとみられます。ただ、古代の大極殿や朱雀門は中国の宮殿建築とは異なる形と考えられ、実際に門などは石造にアーチを作った門の上に建物が乗る形式が中国式です。また塔に関しても日本のような木造の塔は中国やインドには確認できません。いずれにしても中国での発展という観点だけではなく、中国・朝鮮半島を経由して日本にわたる間の変容を考えていく研究課題です。

【大澤正吾「平城宮幢旗遺構の発見―平城京遷都と儀式遺構の変化―」について】

12、９mの幢旗の柱の穴にしては深さが浅いように見えるがどうか？　藤原京の幢旗にも２本の支柱はあるのか？

⇒ 講演会でも申し上げたところですが、藤原宮の幢幡遺構は柱を１本のみ立てた可能性が高く、支柱のない掘立柱の１本柱式と考えています。

宝幢・四神旗の高さは、『文安御即位調度図』によれば３丈（約９ m）とあり、恭仁宮、平城宮第一次大極殿院、第二次大極殿院、平城宮西宮、長岡宮で検出された宝幢・四神旗を立てた柱穴の深さは、いずれも概ね１ m 前後を測ります。一方、藤原宮幢幡遺構では、柱掘方の深さは 1.0 ± 0.3 m、柱抜取穴の深さは 1.4 ± 0.1 m。各遺跡の地山の状況が異なるため単純な比較はできませんが、藤原宮例が他と比べやや深いともいえることや柱抜取穴が大きく沈み込むことを考慮すれば、藤原宮幢幡遺構で使用された旗竿も相応の高さを有するものであった可能性は充分に考えられます。１m前後の深さでは浅いというご意見もあるかも知れませんが、これを両脇の２本の柱で支えますので、充分な強度はあったとみられます。

なお、藤原宮の幢幡遺構については、大澤正吾「藤原宮の幢幡遺構―大宝元年の元日朝賀と儀仗旗―」(奈文研『飛鳥・藤原京を読み解く　古代国家誕生の軌跡』2017年、クバプロ刊）をご参照ください。

13、７本の幢旗を立てるというのは、中国の儀式をそのまま取りいれたものなのか、それとも日本オリジナルのものなのか？

14、宝幢四神旗による儀式は唐と百済とどちらに近いのか？

（13 と 14 は、同内容の趣旨のご質問として、まとめて回答いたします）

⇒ 唐代の元会儀礼（朝賀と会）については、玄宗開元年間の太極殿における儀礼次第を扱った『大唐開元礼』や『唐書』が参考になります。これらによれば、元会儀礼では、儀仗兵が黄色・赤色・白色・黒色・青色の甲冑・旗指物を持って五行に配置され、隊名には朱雀隊・玄武隊がみえます。また、『新唐書』には元日・冬至大朝会・宴見蕃国王などの時に、中央に黄色の旗、左に青色と赤色の旗、右に白色と黒色の旗を立てる五牛旗（車に五牛を設け、それぞれに旗を立てたもの）を立てたとあります。同時に四神旗も立てており、その隊が設けられましたが、立て方や並べ方についてはよくわかりません。

いずれにしても、中国では宝幢・四神旗に類する７本一具の旗は立てられていません。また、唐の旗は兵士などが持つもので、日本の幢旗遺構のように地下に掘削をともなう掘立柱式でもないようです。一方で、宝幢・四神旗のモチーフとなる日月・四神や陰陽五行思想は、古代中国にその源淵を求めることができ、五行をあらわす五色の旗や四神旗も古代中国に確かに存在しています。したがって、朝賀・即位式で宝幢・四神旗（幡）を立てる儀式は、古代中国の思想と器物を取り入れつつ、中心となるモチーフを鳥に変えて７本一具として成立した、日本独自のものの可能性が考えられます。

一方、百済や新羅など朝鮮半島諸国の宮殿で用いられた儀仗旗については、詳しくわかっていません。

では、宝幢・四神旗が唐と古代朝鮮諸国と比べてどちらに近いのか。この点については海外、特に朝鮮半島の史資料の蓄積を待ちつつ、さらに検討していきたいと思います。

15、７本の幢旗の配列を横一列に変えたのはなぜか？　またそれは日本のオリジナルなのか？

⇒ 儀式が古代国家の支配秩序を可視化したものである以上、横一列に配列方法が変化したことには必ず契機と理由があり、その解明は非常に重要な課題です。しかし、藤原宮に見られる三角形の配置から、今回の検討の結果平城宮第一次大極殿前の存在が明らかになった奈良時代前半の横一列の配置への転換がいつ起きたのか、平城遷都当初まで遡るのか、それとももう少し時期が下るのかが未確定であるため、その評価についてはなお慎重な検討が必要です。その理由を考えるためには、講演の最後にお話しした第一次大極殿院南門前の幢旗遺構の候補Ａ・Ｂの評価が不可欠です。これら候補となる遺構の評価をきちんとおこなった後でなければ、配列方法の変化の理由を十分にあきらかにすることは難しいと考えます。今後の成果にご期待ください。

16、平城宮大極殿前に発見された１列の幢旗遺構について、常識的には「青龍」と「白虎」、「玄武」と「朱雀」がそれぞれ相対するが、東から「青龍」「朱雀」、西から「玄武」「白虎」と想定する根拠はなにか？

⇒ 藤原宮の幢幡遺構は、陰陽五行思想の五行で木、五色で青、五方で東、五時で春をあらわす青龍が東北、火、紅、南、夏の朱雀が南東、金、白、西、秋の白虎が西南、水、黒、北、冬をあらわす玄武が北西に置かれており、四神が四方に配されます。さらに烏を中央に配置し、土、黄、中央、土用をあらわすことで、五行が木→火→土→金→水の順に正しく循環する様を象徴しています。加えて、烏の東北・西北に日像、月像を配することで、陰陽をあらわします。

一方、平城宮第一次大極殿院の幢旗遺構は、東から青龍旗、朱雀旗、日像幢、烏像幢、月像幢、白虎旗、玄武旗の順で一直線に並んでいます。四神旗の並び順は、東西南北の各方位には対応しないものに変化しますが、青龍（木・青・春）→朱雀（火・紅・夏）→烏像（土・黄・中央・土用）→白虎（金・白・秋）→玄武（水・黒・冬）という方位以外の五行の位置については矛盾がなく、烏像の東西に日月を置く配列順は藤原宮例と共通しています。藤原宮例の配置と比べると、一見、概念的に崩壊しているように見えますが、モチーフが維持されていることからも、陰陽五行思想を象徴することには変わりがないと推測します。

つまり、７本を一列に配列するように変化させたとしても、烏・日月・四神が陰陽五行思想に基づいて循環・調和するように考えられた順序が、東から青龍→朱雀→日像→烏像→月像→白虎→玄武という配列だったのではないかと私は考えています。

詳しくはこれから論文として発表したいと思っていますので、今後にご期待ください。なお、幢幡遺構と陰陽五行思想との関係についての詳細は、松村恵司「藤原

宮の幢幡遺構を読み解く」（奈文研ブログ。コラム作寶樓。https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2017/03/20170301.html）をご参照ください。

17、どうして柱穴から四神旗の種類までわかるのか？

⇒ 柱穴７基が横一列に並ぶ幢旗遺構については、『延喜式』などの平安時代の史料に、中央の烏像幢の左に日像幢・朱雀旗・青龍旗、右に月像幢・白虎旗・玄武旗を立てると記されており、各柱穴は東から青龍旗・朱雀旗・日像幢・烏像幢・月像幢・白虎旗・玄武旗に対応することがわかります。当日もご紹介した「文安御即位調度図」をはじめ絵図として伝わる幢旗の並べ方もこれに合致しています。

藤原宮幢幡遺構については、『続日本紀』の大宝元年（701）元日朝賀の記事の中で、中央に烏形幢、（北から見て）左（東）に日像、青龍・朱雀の幡、右（西）に月像、玄武・白虎の幡を立てたとあります。これを遺構と対応させると、中央が烏形幢、その東が日像、同じく西が月像、東北（大極殿から見て左前）が青龍幡、東南（同左奥）が朱雀幡、西北（同右前）が玄武幡、西南（同右奥）が白虎幡を立てた柱穴であることがわかります。

18、宝幢に烏が含まれるのはなぜか？

⇒ 烏形幢に取り付けられている翼を広げて頭をのばした金銅製の三本足の烏は、太陽を象徴する三足烏（さんそくう）とも、また八咫烏（やたがらす）とも言われていますが、何を象徴するものなのか、まだ定説はありません。

陰陽五行思想では、五行の土をあらわす獣は本来は黄麟です。しかし、日本では土を象徴する中央の儀仗旗に、黄麟ではなく、烏のモチーフを採用します。これを日本独自のものと考える点は共通する理解となっていますが、宝幢・四神旗のなかで中央に位置する最も重要な儀仗旗に、なぜ烏のモチーフが採用されたのかについては、定まった説があるわけではありません。

烏については、弘仁 14 年（823）におこなわれた淳和天皇の即位式を記録した『淳和天皇御即位記』に「八咫烏」、平安時代院政期の即位式を伝える『文安御即位調度図』に「三足烏」とみえます。宝幢・四神旗（幡）の初出である大宝元年元日朝賀から、烏が「八咫烏」だったのか、あるいは「三足烏」だったのか、途中で変化したのか、そもそも「八咫烏」と「三足烏」が同じなのか違うのかなど、烏そのものの形態がまず問題になります。また、『文安御即位調度図』などには烏が「北を向く」という記述があり、これが大宝元年の最初からなのか、最初は南向きだったものが途中で北向きに変化したのか、という点も未解決の問題です。

新川登亀男氏は、大宝元年の当初は烏は南向きで、北を向くのは和銅８年（715）年を遡らないとします。そして、南向きとすれば、天皇の進出や前進を先導して奉仕を迫るという「八咫烏」の性格がかなり盛り込まれたものになり、それが北向きに変化するのは、そもそも「八咫烏」や「三足烏」に含まれる祥瑞の意に重きを置くように転換し、祥瑞献上の意味が強調されるようになったためであると論じています（「四神旗の諸問題」『日本古代の儀礼と表現―アジアの中の政治文化』1999 年、吉川弘文館刊）。

この説は、藤原宮幢幡遺構と平城宮幢旗遺構があきらかになった現在、非常に示唆に富む指摘と私は考えています。今後、論文として私の考えを発表していきたいと思っています。ご期待ください。

【今井晃樹「平城宮の造営過程―長期にわたる建設事業―」について】

19、平城宮の工事費（当時と現在）はいくらくらいと推定されるか？　また、当時、これだけの高額費用をどのように調達したのか？

⇒ 当時の工事費の算出は難しいですが、現代ならばどのぐらいかかるか、機会があれば建設会社に見積ってみてもらいたいと考えています。工事費用は和同開珎の発行による利益、および労働力の提供を含む、その他の租税でまかなったと考えられます。

20、平城京建築に時間がかかったのは、工事の体制や技術者の数の問題もあったのではないか？　日本人技術者の養成や百済人技術者の渡来はどのように進んだのか？

⇒ ６世紀末の飛鳥寺造営時に百済の工人の指導を受けて以降、木造建築や瓦の製作技術は、朝鮮半島の技術を順次導入しながら発展し、早ければ７世紀なかごろの百済寺（吉備池廃寺）や前期難波宮造営時には、国が管理する技術集団（のちに造寺司や造宮省に属する）が成立していたと考えられます。

21、舟は発掘されていないのか？

⇒ 古代の宮城造営にかかわる船の発掘事例はいまのところありません。

22、巨大建築物を造営する際には完成図・設計図はあったのか、それとも責任者の頭の中にあって、逐次指示したのか？　また、建物の構造は唐から教わったのか、日本の独創はあったのか？

⇒ 寺院や宮殿の造営に先だった設計図は存在したと思います。平城宮についていえば、正倉院宝物の『東大寺献物帳』には「大唐古様宮殿畫屏風」がありますので、少なくとも唐の宮殿の形や様子がわかる絵図は入手していたようです。唐の宮殿を参考に、日本の伝統様式も加味して設計していたと考えられます。

23、朝堂院に建設順として、普通に考えると（建築的には）朝堂をつくってから塀をつくると思われるが、塀をつくってから朝堂をつくったのはどうしてか？

⇒ ご質問のように、普通に考えれば、中の建物を建ててから外の囲いを建設するのが合理的だと思います。朝堂院の場合、順序が逆になったのは、朝堂の建物そのものよりも、朝堂院という空間をつくることが優先された結果ではないかと考えます。

24、軒瓦の型は常に１つであったとする理由は何か？　複数の型があったと考えることはできないのか？

⇒ 大極殿院の瓦は、8 割がたが一つの型で軒瓦を生産しています。さらに、２、３

種類の別の型で製作したものが全体の２割ほどを占めますので、100 ％を１つの型だけで製作したわけではありません。ほかの宮城門や朝堂でも同様です。大極殿院・朝堂・宮城門などの重要な建物は、できるかぎり同じ模様の軒瓦で葺きたいという意図があったのではないでしょうか。ほかの型も極めてよく似た紋様です。

25、平城遷都の計画と大工事、その担当者としての中国人の果たした役割について教えてほしい。唐から設計工事担当を招いたような痕跡はないか？

⇒ 平城遷都の際に、工事に関わる設計者や職人をたくさん連れて来たような痕跡はありません。しかし、鑑真のような僧侶、皇甫東朝のような楽人、袁晋卿のような漢字音を伝えた学者の来日は確認されるわけですから、工事技術者についても中国の有識者や高い技術をもつ人物を招いた可能性は考えられると思います。

【神野恵「平城京を造る―朱雀門と佐伯門前の発掘事例から―」について】

26、旧秋篠川の埋立後の陥没は、大きな地震の影響か？

⇒ 奈文研庁舎敷地内の発掘調査では、液状化や地割れなどの地震痕跡も見つかっています。少なくとも３度の大きな地震に見舞われたとみられ、調査の所見と文献を照合させると７世紀末～８世紀初頭、９世紀～１２世紀頃、１３～１４世紀以降のものと推定しています。この場所は旧河川の埋立地であったため、液状化などを起こしやすい地盤だったといえ、旧河川の沈下も地震の影響が少なからずあっただろうと考えられます。ただ、陥没地には厚い粘土堆積が形成されており、遺物も多く捨てられていることから、大地震などで一気に陥没したというよりは、時間をかけて徐々に沈下していったのではないかと考えています。

27、古い寺院などはよく「釘を一本も使ってない」と言われ、平城京の建物も当然そうだと思っていたが、釘やかすがいを作っていたと知り驚いた。どういう建物には釘を使わないとかのきまりがあるのか？

⇒ 古代の木造建築は、巧みに木材同士を切り欠いて仕口を合わせることで躯体を支える構造を基本とし、見える部分には釘を使わないことから、「釘を一本も使ってない」と評されるようになったようです。しかし、実際には、垂木がずれるのを防ぐなど、見えない部分で釘やかすがいを補助的に使っていますし、柱と横材をつなぐために太い、長い釘も用いています。古代寺院を発掘しても、考古資料として鉄釘やかすがいなどが、たくさん出土します。

28、「うめ立て地の上に建物が建てられてない」とのことだが、この時代も液状化の概念があったのか？

⇒ 古代において液状化の概念があったか否かはわかりませんが、古代の人々にとっても、埋立地は地盤が良くないという理解はあったと思います。なぜなら、平城宮の第一次大極殿も、周囲をまわる回廊部分は埋立地で沈下してしまっていますが、大極殿そのものは尾根筋にあたる地盤のしっかりした部分に建てられていますし、

古代寺院も中枢建物は、埋立地ではない、もともと高い場所を選んで建てられています。古代の人々がさかんに地鎮祭などをおこなった痕跡は、そういった液状化や地盤沈下を恐れたからかもしれませんね。

29、鍛冶炉跡が見つかったとの事だが、工具などはたくさん発見されたか？　1300年前の鍛冶道具はどのようなものだったのか知りたい。

⇒ 残念ながら、明確な工具は出土していません。平城京などの出土品などから「やっとこ」のような工具や金槌などを使っていたのだろうと思います。今回の出土品の中では、土師器の甕や須恵器の壺、甕、杯などが出土しています。とくに土師器の甕は、胴部径が 15 ～ 20cm 程度のやや小型のものが多く、熱を受けている状態の破片もあります。おそらく、普段は食器や調理具として使われていた器を、工房の道具として使用したのではないかと思います。

30、羽口は何でできていたのか？

⇒ 羽口は粘土に砂粒を多く入れて焼いた土の焼き物です。古代においては、食器として使う土器には、粘土に砂粒をあまり入れないのですが、砂粒が少ない土器は耐火性が低いため、羽口のように高温を受ける土製品は、砂粒をたくさん入れて、ざらざらの粘土で作っています。また、稲の籾殻や藁など植物性のものを粘土に混ぜ込んで耐火性を高める工夫をしている例もあります。

【玉田芳英「古代都市　藤原京の実態」について】

31、水洗トイレできれいだったとのことだが、なぜ文献に「汚ない」と書かれているのか？

⇒ 『続日本紀』のこの記述は、前後の文脈から、官僚の綱紀粛正を求めたものと考えられています。水洗トイレの汚水とみることもできますが、遺体を放置していることを戒めたものと考えられています。

32、方九里、１里400mは４㎞ではないか？

⇒ 里などの単位は、時代や地域によってその値が異なります。周代の 1 里の長さは 400m ほどです

【講演全般について】

33、平城遷都の詔を出した元明天皇は、夫（文武天皇）の両親（天武天皇・持統天皇）の遺志をつげなかった悲しみがあると思う。首皇子を天皇にしたい藤原不比等の強い意志は考えられないか？

⇒ 今回の講演会の目的は、最近の発掘調査や研究で得られた新しい知見の紹介でしたので、ご指摘のことについてはふれませんでしたが、藤原不比等の関与については有力な説の一つとしてこれまでも言われています。不比等が自分の孫にあたる首

皇子の即位をめざしたこと、その意味では平城京が将来の聖武天皇、すなわち首皇子のために造られた都という一面をもっているのは確かでしょう。遷都の理由は一つに限られるものでもなく、藤原不比等の関与も含めて、さまざまな要因があったと考えられます。今回簡単にご紹介した、藤原宮内裏が低湿な環境と考えられるという知見も、それに関連するのかも知れません。

34、大規模な土木工事は誰によるものと想定されるか？　行基の存在が大きかったと想定されないか？

⇒ 都の造営は、国家の主導による大事業です。それをリードしたのは元明天皇と藤原不比等ですが、特に不比等の果たした役割が大きかったのではないかと言われています。行基は、後に聖武天皇による大仏造立などの際に重要な役割を果たしましたが、平城遷都の段階では、まだ活躍は知られていません。

35、藤原京（藤原宮も）の藤原の語源は何か？　建設当時は何と呼ばれていたのか？

⇒ 『万葉集』巻１の 52 番歌、藤原宮の御井の歌に「あらたへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて」とあるのにより、地名「藤井が原」に由来するとみるのが最も一般的と思います。藤原氏のウジ名もこの地名に基づくと考えられています。なお、史料には「藤原宮」とは出てきますが、京を「藤原京」と呼んだことは確認できません。「新益京」（あらましのみやこ）というのが史料的に確認できる当時の名称です（『日本書紀』持統天皇５年 10 月甲子〈27 日〉条・同６年正月戊寅〈12 日〉条）。それまでの飛鳥浄御原宮の北西方に、新たに益された都という意味とみられます。

36、平城京はなぜ下ッ道に軸を合わせて設計されたのか？

⇒ 下ッ道（中ツ道・上ッ道も）は大和盆地を南北に縦断する幹線道路で、平城遷都以前の７世紀段階で造られ、藤原京造営の際に材木などの物資運搬にも用いられたと考えられています。下ッ道に軸を合わせたのは、そうした歴史的性格や、盆地北端の地形を総合的に判断した結果と考えます。

37、元明天皇は何故建設途中の平城京に遷都したのか？

38、大極殿もなく、なにも整備されていないところで天皇・高官は安心して政治に打ち込めたのか？

（37・38 は同内容の趣旨のご質問として、合わせて回答します）

⇒ 私たち自身も都が完成してから遷都したと考えて疑ってきませんでしたが、都の造営が想像を上回る大事業であったことを考えれば、政務運営に最低限必要な設備が完成した段階で遷都を敢行することは、充分あり得ただろうと思います。

　第一次大極殿はあくまで儀式の空間ですので、当面の日常的な政務の運営は大安殿があれば可能だったと考えられます。714 年末に藤原宮からの大極殿の移築が完成し、初めての平城宮での元日朝賀行われた 715 年の秋に、元明天皇が元正天皇に譲位したのも偶然ではないと思います。

39、密林や砂ばくの中にある都市が捨てられたわけではなく、文献もあり、人がまわりに住んでいるのに、なぜたかだか千三百年で、埋まってどこになにがあるのかわからなくなってしまうのか？

⇒ 遺跡が現在の生活面よりも下に埋もれているのは、自然的な堆積と人為的な堆積の両方の影響が考えられます。まず、自然的な堆積については、植物が生育すれば、自然であれ栽培であれ有機質がつくられ、土壌が形成されていきます。また、洪水や土砂崩れなどで一気に土壌が堆積する場合（もちろん削られる場合）もあります。砂埃による堆積もあるでしょう。

一方、人為的な堆積については、建物の建て替えなどの際に整地をしたりかさあげをしたりすることを思い浮かべていただければよいでしょう。また、田畑の耕作の際に、客土を行って土を入れる場合もあります。なお、人為的な堆積で一番厚いのは、近現代に行われた造成に伴う盛土です。なかには数mに及ぶ場合もあります。

藤原宮跡では、2015 年度の飛鳥藤原第 186 次調査で、藤原宮廃絶後、大極殿院内庭は奈良時代のうちに急速に耕地化が進み、奈良時代から平安時代にかけて掘立柱建物が何度も立て替えられていることがあきらかになっています（廣瀬覚・清野陽一・大澤正吾・山本亮・川畑純ほか「藤原宮大極殿院の調査―第 186 次」『奈良文化財研究所紀要 2016』）。平安時代には旧藤原宮域の周辺には「宮所庄」、「高殿庄」、「飛騨庄」といった荘園が置かれ、条里制で区画された田畑が広がる景観へと変わっていったとみられます。

このような平城遷都後の土地利用の変化の中で、藤原宮があった場所はわからなくなってしまいます。耕地化により宮の跡や町割りの跡の多くが消され、藤原宮の位置を記す史料も、「藤原宮の御井の歌」（『万葉集』巻一）から大和三山に囲まれた範囲にあったこと、鎌倉時代の『扶桑略記』や『釈日本紀』から「鷺栖坂」の北にあったことをわずかに伝えるのみとなります。

平城宮の場合は、都が離れてから 80 年ほどの 864 年には、都の道路が田畑に代わっているという記録があります（『日本三代実録』貞観６年 11 月７日庚寅条）。平城宮跡では、一般に 100 年で 3 ㎝ほどの割合で土が堆積したと言われています。1000 年で 30 ㎝ということになります。平城宮跡で実際に発掘調査を行うと、場所にもよりますが、田畑として耕作されていた上面から 30 ㎝から 50 ㎝程度掘り下げると、奈良時代の地面が出てくるというのが一般的な状況です。

なぜ埋没し、わからなくなってしまったかといえば、その時々を生きた人間の営みによるもの、といえるのではないでしょうか。